

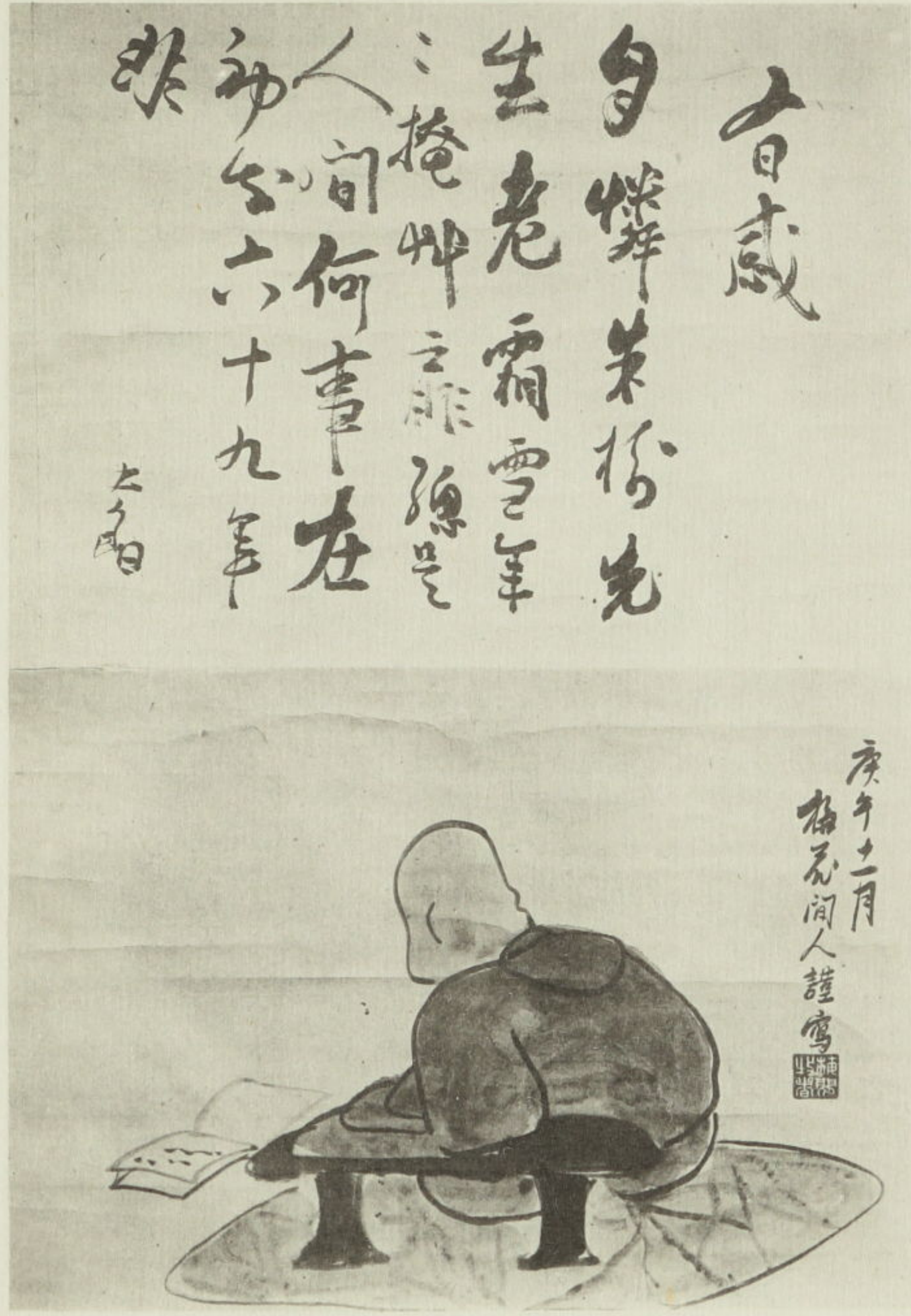


枇杷園士朗傳

全







藏寺運照 像西朗士上井 筆間梅田岡





名古屋市中區榮町照運寺墓內 井上士朗墓碑

### 枇杷園士朗傳

佩蘭居主人大口吐虹

士朗、氏は井上、名は正春、士朗は其字なり、通稱を専庵といふ、名古屋新町の醫なり。新まちは今の東區鍋屋町二丁目の舊名なり而して士朗の故宅は同町十三番地十四番地に當る今名古屋醫家姓名録名古屋圖書館藏書に依り、士朗の子なる専庵が書上げたりし、父祖以來の醫歴を見れば、

一段席。井上専庵  
初代。井上安隆。新町に住居。本道醫師に而師家は不相分。

享保十七子年四月死。

二代目。井上安清。家業相傳享保十三申年二月壹人立。

寛延二巳年十二月御目見。

安永五申年九月死。

三代目。井上専庵。田中安益様え入門、本道醫術修行仕。

寶曆七丑年二月壹人立。

安永六酉年十二月御目見。



天明四長年四月御用懸り。

寛政七卯年正月御用人支配。

寛政十三酉年二月二ノ丸御次療治。

文化九申年五月死。

當代。井上專庵。父專庵より本道醫術相傳仕。

寛政五丑年二月壹人立。

享和三亥年四月二ノ丸御次療治。熨斗目着用相濟申候。

文化四卯年八月二段。

同 五辰四月一段。

井上立安。一段席井上專庵忝。

文化十四丑丸淵仲山え入門本道。

文政九戌四月壹人立三段。

此の如き記載ありて、祖父安隆より新町に住して醫を營み、安清に至りては醫業も相當に行はれしものゝ如し、松平君山門下の俊才、磯谷滄洲の買山集滄洲自筆の詩文集  
鈴木寅松氏所藏に、其の墓碑銘を載す。

井安清墓碑銘

君諱正純、字安清、井上氏、尾張人、家世業醫、凡人來邀乞診者、雖暮夜倉卒必匍匐而往、惟恐後、其察病施治、莫不盡心、親戚故舊、有窮乏者、則分財而救之、必俟其安而後已、鄉黨號爲長者、以正德癸巳生、以安永丙申九月十八日病卒、享年六十有四、無子、以其弟之子爲子、善繼其業、葬之日會者如市、乃立石、以表其墓、銘曰。

夙學軒岐、竊慕洙泗、君子慎術、居仁則知、視人如己、弃利取義、九京之下、對賢無愧。

此石碑は、今照蓮寺に見當らず、余は嘗て任職と共に墓地を隈なく搜り索めしが、遂に得る所なかりし、蓋し新築町の大道路開かれ、墓を移し、時、無縁塔下に埋没せられしものならんといふ。

士朗に至りては、其術大に行はれて、當時の流行醫たり、今日世間にて、病者稍重態に向へば、誰の博士、彼の博士と、名醫を聘する習なるが當時に在りて此の如き場合には、必士朗を煩はす事なりしといふ。

士朗の墓碑銘は、同じく君山門下にて博學の稱ある、恩田蕙樓の撰する所なり。



松翁先生之墓

井上正春、稱專庵、晚號松翁、家世業醫、精方藥、又遊賀川氏門學產科、聲名藉甚、請療者每日切躋、門前如市、餘力留意蕉門俳諧、超凡入妙、名馳海內、東則奧羽、西則豊肥、聞風來學者甚多、號爲士朗、又號朱樹叟、所著有枇杷園句集、枇杷園隨筆等、文化九年壬申五月十六日病卒、年七十一、銘曰。  
不啻醫術、兼善俳諧、狀物之妙、矢口輒佳、海內貴之、泰山北斗、聲名藹然、千載不朽

恩田仲任撰并書

此墓碑は、幸にも北の扉際に移されて、今は衆人渴仰の中心となれり、文中の聲名藉甚、請療者毎日切躋、門前如市は、實を記せるものにして、決して諛墓の文にあらずといふ。

國枝松宇老足先生といふの童時、士朗より、扇面に一人物を書き、此やうな人間もあり秋の暮と賛して贈られしを、老後に文函より見出して、今昔の感に堪へず、文を題して合装せるもの今尙は國枝氏に藏す、而して其文は松宇遺稿にも載せたり。

書士朗翁遺墨後

是良醫士朗翁之遺墨、一日獲之函底、先考與翁有通家之契、當時余童胤、其來遊弄翰之次爲余所戲寫也、今而觀之、宛然如接翁丰彩、余於是有所感焉、先妣嘗語余曰、汝在胎之日、脚氣病多傷人、吾亦罹之、因請翁之治、其治不止投劑、特有滋味之警、懇篤無所不到也、累月而全愈矣、庸醫治此病、爲滋味所誤者往々有焉、益仰翁云、嗚呼余之有今日者、可不謂翁之賜乎哉、竦然久之、翁奕世之醫、嘗入京師、學吉益氏古方、又受產科秘訣於賀川氏、其爲人澹泊淳厚、竭力於刀圭、起死回生、不爲少、聲名藉々焉、旁好諧歌、超凡脱俗、名馳海內、流輩稱曰蕉叟再生、然翁志在仁術、如諧歌其緒餘耳、其徒所寄謝之金財、皆付與俳林脚之徒而不顧、其高尚可想、而世人謾以諧歌稱翁、甚者不知其爲醫、余不能無憾焉、翁井上氏、諱正春、號朱樹、又枇杷園、晚號松翁、士朗其字也、通稱專庵、家于府下新街、以文化九年壬申年五月十六日歿、享年七十一、墓在東寺街照運寺、墓表文則恩田蕙樓先生所撰也、予觀其遺墨、追慕不已、謹識其顛末、併附小傳云。

明治十年丁丑五月

東邨塾老國枝惟熙拜書時年八十又二



士朗の歿したる文化九年は松宇十七歳の時なれば、其見聞記憶は確なるものあるべく、殊に平素往來せる間柄にして其居も餘り隔たざれば、餘人よりは多く知れる所ありしなるべし、且自身、母胎に在りし時、母の難病を救はれ、童時より之を母の一つ話に聞かせられしと共に、之に類せる幾多の物語は常に耳にせし所なるべし、されば起死回生不爲少と記せるは松宇の性格より考ふるも、決して誇大なる漢文書きにはあらで、此僅なる一句中に、數多の事實を含めるなるべし。

余が、古老より聞き傳へたる、左の物語あり。

建中寺の方丈、重き病に臥し、幾多の醫の治を求められけれども、何れも回復の望なしといふ、尾張國主の菩提所にして、勢威赫々たる同寺の事なればあらむ限りの名醫を請じけれども、何れも施さん術もなし、茲に一人の長老が云ふ様、かく數多の醫者達を頼みても埒明かず、開けば、井上專庵は、町醫なれども當時評判の良醫なりと、今此危急に臨みて、町醫の何のと、身分の詮議をすべきときにあらず、一度專庵を請じては如何にといひければ、一同之に賛して、早速診察を乞ふこととなりぬ、士朗は、熟々此病人を診し了り

ていふ様、いまだ見捨てたる容體にはあらず、萬事我が差圖に隨ひて、服藥看護したまはし、回復の望ありといふ、一同之に力を得て、如何なる命にも従ふべし、是非に投藥したまはれと乞ひければ、懇に看護の法を説き、心を籠めて診療せしかば、諸名醫が匙を投げたりける病者も、日に／＼快くなり行きて、遂に全愈せり、一山の喜譽ふるにもものなく、方丈も再生の恩人なりとて、厚く金幣を齎らせて謝儀せられるに、士朗は過分なりとて受けず、再三の後條件を付して之を受け、其金を米に換へ、門前に建中寺より多額の謝儀を贈られたるに依り、之を頒與する旨を掲示して、悉く之を貧民に施與せりといふ。

又藩の重臣某一万石を領せる人なりと云急劇なる病に罹り、日頃お出入の醫師はいふに及ばず、奥醫師の誰彼を聘して、治療を求められしが、何れも手を下さむ様なく、呆然たるのみなり、一門の人々、老臣共、唯だ愁ひ惑へる中に、一人の老臣がいふ、井上專庵と申す町醫は、近頃評判宜しく候、物も試しと申候、之を御招き相成ては如何と申出ければ、早速に迎へられたり、士朗一診して言ふ様、我が差上ぐる藥召したまはし、或は効あらむ、されど到底我が藥は召



され難かるべしといふ、一門の人、老臣達、主人に勸めて、懇請止まざりければ然らば我が薬差上ぐべし、早速お厩に参られ、最も新しき馬糞三つ四つ持ち來たまはれといふ、程なく塗盆の上に湯氣立てるを持ち來ければ、白絹もて之を包み、盃中へ搾り出したる液汁を進めたり、誓詞の手前、服用を否まむ事もならず、一口飲まむとせられける時、忽ち嘔氣を催して、甚だしく汚物を吐かれたり、士朗は之を聞いて、今は其物を用ひたまふに及ばず、別に薬を差上ぐべしとて調劑せり、さる中に病勢も稍薄らぎ、苦痛も遠のきぬれば、一同愁眉を開かる、中に、並居たる御醫師達は手持無沙汰にて、格式を重んずる當時の事とて、同席をも許さぬ町醫士朗に、如何なる處方に據れるかを詰問しければ、士朗は某の醫書にしかくの方を載せたり、夫に據りて我が薬を進め参らせたる也と、明瞭に答へければ、衆醫は返す言葉もなかりきとぞ、かくてさしも劇しかりし病も、程なく平癒しければ、士朗の名譽一層世にもてはやされたりといふ。

士朗が、醫術に精しかりしは、上に述べたるが如し、而して其師とせる所は、古方を以て有名なる、吉益東洞と、産科に一生面を開ける、賀川玄悦となるを

思へば固より當然の事といふべきか、斯く士朗の名聲高ければ、有司も之を藩醫に擧げんとして、屢々内命を下せるが、扶持を賜りて拘束を受くるは、好まざる處なれば、毎に辞退して、一生を町醫に終れり。

古の醫家は、必漢學の素養あるを要せり、然らば士朗の漢學の師は誰人なるか之に付ては何等の徴すべき資料なし、唯此時代に於て、松平君山は、博學の稱ありて、本草學をも講じ醫家中其門人たりし人もあれば、或は其門に學びしにはあらざるかとも思はるれど、父安清の碑文の、磯谷滄洲が手に成り、又其友なる高間春渚の、滄洲門下なるより推測すれば、或は滄洲の教を受けたるにはあらざるか、兎にも角にも、詩をも作り、又上記の春渚と、國枝午窓との碑文をも物せるより觀れば、相當の師に就きたりし事は否むべからず、依りて今其撰に成れる春渚が碑銘を掲げん。

春渚墓 貽安道榮居士

君、諱明遠、字季文、號春渚、又稱清環堂主人、尾張人、李蹊之弟也、爲人敏惠、温厚而有才氣、李蹊之將死也、召君囑以後事、曰吾今且死、不能終母氏之養、是可憾也、汝善事之、於是奉兄之言、事母益謹、育兄之子一男一女、視之猶己



子、循々然無私營、家事大治、可謂勤焉、嘗師事滄洲先生、篤志文學、又善繪事、性能容人、風流醞藉、清風朗月、坐上客滿、舉杯酌酒、翰寫胸襟、或慘然下淚、既而嘆曰、如此可以遣吾情也天明丙午十一月二日病歿、年三十、葬于城東乾德寺先塋所在、會葬者如雲、莫不悼惜焉、君娶尾關氏、生男、早夭、君嘗與吾輩、結五子之社、午窓者先已逝矣、今又遭此不幸、嗚呼悲哉、銘曰  
維孝維友、宜弟宜兄、神之在此、雪白月清。

井上正春謹撰

國學は、寛政元年三月、本居宣長が此地に来れる時、贊を執りて其門に入り、鈴屋門人録に其名を列せり、句集續編に、本居大人彌生の晦日ころ伊勢の國へ歸り玉ふを送て、松坂の松こそ春のこまりなれとあるは、此時の吟なり、俳諧に遊ばむ者も、皇國學びの必要あるを感じ、士朗の發意なるか、曉臺の勸めなるかは知らざれども、此時暮雨巷の同門、相率ひて鈴屋に入門し、後に松兄等も入門せるは、其着眼已に尋常に卓越せりといふべし。  
士朗は、又書を長崎の勝野范古に學び、平曲を荻野檢校に學びて、共に其妙境に至れり

荻野檢校は、名を知一さいひ、廣島の人なり、年廿三、京師に出て、明和八年四十一歳の時、名古屋に移り住し、享和元年六月廿二日七十歳にて歿せり、墓は小川町法華寺に在り、平家正節を著し、平曲に堪能の譽高き人なり。

俳諧は、言ふ迄もなく暮雨巷曉臺の門人なり、されど何時より俳諧の門に入りしかは明かならず、曉臺が名古屋城下に復歸せしは、明和の初年なりと覺しく傳ふる所に依れば、士朗も水野萬岱などに勸められて、俳諧に指を染しといへば、明和三四年、士朗が二十五六歳の頃ならんか、曉臺が姑射文庫を出し、秋の日を選せるは、明和五年にして、秋の日に支朗の名にて、明和五年戊子九月山莊に宿してと前書して、鹿老て妻なしと鳴夜もあらんの立句にて歌仙あり又翌年二月望に、堅並集の序文を書ければ、蓋し其前二三年より俳諧の門に入りしものとして大差なかるべし。

此逸足が、一たび俳諧に志してより、正風復古の主唱者なる、俳傑曉臺の指導により、驟々として大成の域に進み、忽ち儕輩を擢んづるに至れり、岡田梅間が力草に記せる所あれば重複を厭はず、次に之を記さん。

琵琶園士朗傳

俗姓井上專庵、名は正春、字士朗、號枇杷園、後又琵琶園といふ、平曲に名あ



るによりて也、朱樹臺といひ、晩年松翁ともいふ、文化九年申五月十六日歿  
 禪寺町下ノ切東側、照運寺ニ送ル、父は井上安清といふ醫家也、朗師、實は守  
 山村の人といふ、安清子なし、よつて書生の時より子となすと云ふ、朗師に  
 いたり、業を古法に學び、京師に登り吉益周輔に従ふ、中參より專醫術行る  
 産家をも兼、晩年中風起り、業は子にゆだね、又專庵と云ふ醫業門人廿五人  
 に及ぶ丸淵仲山をはじめ  
石川春草にいたる俳諧は、墓雨巷曉臺に學ぶ、壯の頃と雖も、師鷄中の白鶴  
 にて、何事も曉叟士朗をもて荷擔の人とす、初めは支朗と書す、安永の初よ  
 り專字の士朗の字を用ゆ、門人あまたのうち、信濃素榮といふもの、曉叟を  
 學ばず、ひたすら士朗にのみ學ぶ、曉叟歿後、暮雨門人悉士朗に伏する者、  
 羅城、桂五、岱青、大阜、岳輅、少汝の徒也、外松兄、天老など、壯人の人々は  
 かりしらす、居宅は新町中程北カハ、天明烏有の時、宅の東に新道をひらか  
 る、爰を專庵横町と云ふ、安清より傳はりし居宅なり、師歿後、故ありて醫門  
 人宇都宮尙山といふ住る、今以居住す、撰集又あまたにて、かぞへつくし難  
 し、人知る所なり、畫は長崎の范古に學ぶ、范古江戸にありし時大夫遠山豆州の  
召抱へ上りて三ノ丸屋敷長屋に差置る赤塚神  
 明神主近藤求馬金章鐵炮塚駒屋増兵衛、春清三人同道にて折々參りしと、予以

物語也、遠行は、京、大阪、兵庫三井寺、須磨、明石へは兩度も參られたり、  
 江戸は享和二年編者云元年  
の誤ならんの春、道彦招請にて東海道を下向、卓池松兄  
相從ふ歸路中仙道  
 へ頼、所々上穂、善光寺、諏訪、飯田、松本など、所々にて俳諧あり、雀芝集五  
 卷あり、歿後肖像を葬地へ納め、編者云今照運寺所藏の物にして  
此集に附せる寫眞版即其物也又一軸をも寫て庵中に  
 有り、此軸所望にて  
黄山へはつる七回忌、句碑を照運寺中に建編者云今照運寺玄關前にあるつ  
この句を刻せる物は是なり發句は、句  
 集同後編あり、類題句集小冊二、永樂堂にて梓行す。

付合のうち 山吹の花を分け入る庵にて

編者云こは麻刈の附合にて  
曉臺に士朗が付けたるなり

鶯に貌なかめられたり。

鼻息もせず庵をたてこめて

編者云こは法々華經梅花品の附合  
にて羅城に士朗が付けたるなり

月か出たとて蛙鳴なり。

ちよほくと鹽燒竈を作る也

編者云こは庵犬集卷二、百韻  
中の句にて共に士朗なり

親なり子なり物のいひよき。

梅間は、又同じ力草に、曉臺の俳風を論じて士朗に及べり。  
 曉叟、正風復古にかたのごとく骨を折られたり、先づ美濃風の餘りに下々に  
 俗間に落過て、かゝらぬかた言などいひ出て、文雅のはしをいふにもたらぬ



に至る、さるを句體を雲上に仕直し、或又萬葉ふりに發句なども作りて、ち  
といやらしきやう也、枝折萩、夜の柱などいふ集にて見るべし、士朗は、  
曉叟の地ならし柱だてを請つぎて、又更に正風の深致、かつは句上に風流を  
つくして、付合は殊更翁のすぢをよくも探り得たる人なり曉叟なくば、朗師  
の風流もかくまでにはいたらじ、朗師なくば、東奥、九州、伊勢、三河、甲斐  
の風流、信濃、近江の口き、も出來らまじ、實に蕉翁己後一人の俳仙といふ  
べし。

文中稍曉臺を貶したるは、正鵠を失すれども、士朗を稱讃せるに至りては、當  
時に於て誰しもしか思へりし處を記述したるものにして、之を梅間の一私言  
と看るべからず。

沼波瓊音氏が、嘗て帝國文學誌上、に朱樹叟士朗と題して發表せられし中に、  
一具庵一具の文を引用せられたり、其文に曰く。

乙二好奇而情刻、故迂遠難聞也、道查有才而學淺、故孟浪欺人也、成美守情  
而不曠、故豪宕殆缺也、梅室奇才而詔世、故雅少近俗也、蒼虬卓池風味斯過  
淡、故語勢柔弱也、士朗雅致滿腔、故句博情深也、芭蕉沒後、伏于破衲只一人

矣、其餘俳士、雖一時有蓋世譽、唯以自己狹羸臆見句作、而不辨杜律山家微  
味、故景情無可與採取、而稱正風宗工、欺誑世人之眼目、而已尤可憐也。

一具は、俳諧に一隻眼を有する者なり、其士朗に傾倒せるの厚きも、好む所に  
阿るといふべからず、梅間の評と併せて看て、共に僻見にあらざるを知るべし。  
余は謂ふ、士朗の俳諧は、春水滿四澤が如く、博大にして和平温雅なり、眞に  
よく正風の體神髓を得たりと、若し誤つて之を後の俗俳と混する人あらば、  
余は其人を以て俳諧に盲目なりといふを憚らず。

當時尾張の俳諧は、士朗を中心として、同門なりし圓珠庵羅城、金森桂五、渡  
邊岱青、村瀬大阜、虎足庵岳輅、花癖少汝等あり、又門下には、木犀居松兄、小  
見山天老、高橋大蘇、矢野五道、岡田梅間、竹内竹有の徒ありて羽翼をなし、其  
勢力の盛なる、東西の行脚は皆此所に喰留められ、此の關門を通過し得れば、  
天下に横行して、我は尾張の俳諧を濟したりと稱へ、得々たりしといふ、稱し  
て俳諧の登龍門といふ、豈虚稱ならんや。

士朗が門流は諸國に多し其錚々たる者を擧げんに三河に鶴田卓池、中島秋舉、  
信濃に藤森素榮、久保若人、成澤雲帶、櫻井蕉雨、飛驒に高山儲史、陸前に遠藤



曰人、陸中に平野平角、伊勢に徳田椿堂、鈴木李東、長井孔阜、淺原推己、奥田青川、近江に前田宇洋、攝津に仁木桐栖、長谷米彦、豊後に佐藤葵亭、肥前に秋山吾友、平田祥禾、松の森其映、等あり。  
今如何に士朗の俳風が世に流行せしかを證せんが爲、其關係ある俳書を列擧せん。

枇杷園句集。半紙本二冊。文化元年秋の桂五の序文あれど、編中に文化四年七月歿したる、悼松兄の句あれば、其以後の出板なるべし、兎に角士朗在世中、精選の上にも精選して出せる句集なり。

枇杷園句集後編。半紙本二冊。士朗の歿せる文化九年秋、卓池秋舉の選して、板行せるものなり。

類題句集。小本二冊。文政八年秋、梅間が輯むる所なり、初の表題は、類題士朗叟發句集とありしが、いつの程よりか枇杷園類題發句集と改められたり。

七部集と稱するものに、左の三種あり。  
士朗七部集。巾箱本二冊。文化八年初冬の序あり、兵庫の五彩堂桐栖の輯

むる所にして、七種の集を收む。

枇杷園七部集。半紙本四冊。文化十一年夏、梅間の輯むる所なり、六種の集と隨筆とを收む。

枇杷園七部集。小本十冊。初編より五編迄、各上下二冊。初編には、文政八年の蓼光庵月底の序ありて、朱樹叟存世の俳諧七卷を擧て、枇杷園七部集初編と題し、書林東壁堂か上木せんとす云々とあり、次に記する五七集と板木は同じくして、唯順序を異にするのみなり。

明治以後出板の各種の俳諧年表に、文化二年士朗七部集出板の記載あれども、余は之を知らず、若しは文化十一年の梅間選のを誤れるにはあらざるか。

士朗五七集。小本五冊。三十五種の集を、略は出板の年代順に輯む、内容は前の七部集に同じ。

俳諧二大家集。朱樹士朗  
竹葉月居小本二冊。平安其成輯録。士朗之部の一冊には、文政十年春、平安十丈園十丈が序あり、伊勢の椿堂の許にありし士朗の歌仙を收め、末に士朗翁發句萬が一をしるすとして、六十一句を載す、序文左の



如し。

曩有士朗七集、世誦不厭、將得隴望蜀、於此吾平安其成、搜其殘稿、及月居士之遺草、合而成集、以示予俾志其末簡、予惟、古人所謂咳唾成玉、近代俳諧之流、亦不乏其人、然或瑣褻異質、琢磨變形、家々之珍一而不足、就中太玲瓏者、爲朱樹翁、尤溫潤者、爲月居士、是此二家、所以相比肩也、嗚呼雖二先生已往、而使後生、聞鏘々于異時、驚瑩々于今代、撰者之婆心、不亦多乎

文政丁亥春平安十丈園主人題

收むる所の集は、次の三種なり。

浮巢守。

花園集。文化二乙丑霜月。

初雪集。平安甲子居僊草序。

以下、安永より文化に至る各時代に涉りて板行せられし、集名を擧げん。  
幣ふくろ。安永三年甲午五月。士朗都貢上京歸路參宮日記。曉臺七部集中に收む  
留守懷紙。天明二年十一月。亞滿跋。五七初編に收む  
樂書日記。寛政四年閏二月。士朗多度紀行。七部集初編に收む

後日記。同 五年三月。士朗騏六二人曉臺墓參に上京紀行。

落梅花。同 年 五月。曉臺追善集。五七初、七部二

麻刈。同 年 十月。蕉翁百年祭俳諧。士朗序。梅間七部集に收む

草枕。同 年 七月。素檠序。同選。桐栖七部集に收む

於本尊。同 年 八月。傳芳序。岱青跋。大魚撰。五七初、七部二

松の炭。同 年 五月。士朗序。蕉雨選。桐栖七部集に收む

昔合集。同 年 八月。士朗序。岱青跋。桐栖七部集に收む

松硯。同 年 九月。士朗序。岱青跋。五七初、七部三

法々華經。同 年 正月。士朗序。岳略選。曉臺七回忌追善集。梅間七部集に收む

山吹集。同 年 道彦序。五七二、七部初

名なし鳥。同 年 名なし翁序。五七二、七部三

花橘集。同 年 七月。草居序。士朗跋。五七二、七部二

橋日記。同 年 九月。卓池選。桐栖七部集に收む

人來鳥。同 年 春。青川撰。五七二、七部四

玉くしけ集。同 年 十一月。白居追善集。五七二、七部三



梅藏人。同年三月。天老序。墨湖の墨梅書五葉に渉る。

此前後の出版と覺しき物に、春鶯囀、續赫夜姫、秋風餘情、椿堂撰 玉垣集 孔  
卓選等あれども、余は未だ之を見ず。

崔芝初編。享和元年三月。道彦選。成美序。江戸にて出版。

同 編續。同 李臺選。道彦跋。同。

同 二編。同 年初夏。文兆序。柳莊跋。善光寺にて出版。

同 三編。同 年夏上木。松本之卷。仙市 阿彦同輯。松本にて出版。

同 四編。同 年四月。諏訪之卷。若人編。諏訪にて出版。

同 五編。同 年四月。飯田にて出版とあれども、名古屋風月堂梓行。

崔芝集。半紙本五冊。前の各所にて出版せるものを纏め、名古屋にて更に板行  
せり、初は玉山房菱屋久兵衛出版なれども、後には永東より出せり。

三日月集。享和二年二月。少汝序。白圖遺稿。少汝補。

玉笈集。同 上。士朗序。其靜 何尺校。

郊久邊日記。同 年。士朗伊勢紀行。

桐栖梅間共に七部集に收む

五七三、七部三

桐栖梅間共に七部集に收む

五七三、七部二

庵の犬。同 三年。六卷あり。野雀 五道 大蘇 同輯

桐栖梅間共に七部集に收む

秋風紀行。文化元年十一月。岡崎紀行。方明 五雄輯。

五七三、七部三

飛波婦久呂。同 四年正月。巢兆序。魯隱跋。

五七三、七部四

閑古鳥。同 年六月。對竹序。岳輅輯。乙因追悼。

五七四、七部五

於寶路夜集。同 六年晚夏。大阜序。

五七三、七部四

名なし草。同 年 秋。卓池序並校。松兄遺稿。

五七四、七部初

口笛集。同 年 秋。

五七四、七部初

うらか羅壽。同 年九月。士朗序。

五七四、七部初

藁つと集。同 七年仲秋。騏六序。

五七四、七部四

批杷園隨筆。同 年九月。五道秋舉大蘇同校。

梅間七部集に收む

玉うさき集。同 年九月。梅間序。

五七五、七部五

木瓜つし。同 八年 春。得芝序。士精跋。

五七五、七部三

長壽樂。同 年 春。竹有序。應汀選。士朗七十賀集。

五七四、七部五

飲中八歌仙。同 年 夏。槎雀序。野秀平齋 五道選 士朗七十賀集

五七四、七部初

ぬのふくろ。同 年。鹿野編。士朗七十賀集。



きねうた。同 年仲秋。

五七五、七部五

泣瓢集。同 年十二月。大阜序。

五七五、七部五

蓑虫集。竹有序。士朗跋。窓巴追悼。

五七五、七部五

柴の戸集。岳輅序。士朗跋。

五七五、七部五

文化五歌仙。文化九年 春。

五七五、七部二

士朗歿後、追善集として、余の知れるもののみを左に記す。

あとのどもし。文政元年。枇枇園二代井上專庵序。七回忌。

さみたれ。同 七年夏。五道序。月底選。十三回忌。

飛濃木桂散。同 九年冬。大曾根三日月庵再興。兼士朗追善。

飛波のみ。天保五年五月。楚雀序。武貫跋。廿三回忌。

飛とつ鷺。同 九年五月。卓池燕岡社。廿七回忌。

以上挙げたる外にも尙ほあるべく、又士朗の序を求め、其勢を假りて出板せるものは、かぞへ盡し難かるべし、其選集の多くして、而して更に之を輯録したるもの、或は七部集と呼ばれ、或は五七集と呼ばれて、廣く世に行はれしを思へば、其俳諧が天下を風靡し、覇を稱へたるを證すべし。

享和元年の東行に、道彦があらん限り心を盡して款待し、又歸途信濃路に於ける歓迎の盛なりし事は、崔芝集五編に載せたる、巢兆の繪を以ても窺ひ知ることを得、我藩儒細野要齋が編せる、尾張名家誌二編士朗傳中に、

嘗遊江戸、遠近俳客悉出迎之、及歸皆贖之、其金殆至三百兩云、其爲人所慕如此。

とあり、要齋は、士朗が歿せる前年の出生なれば、其少壯の時には、士朗直門の士も尙ほ多く生存し、夫等の人より聞き得たる實話を記したるものなるべけれども、享和元年の金三百兩は、實に莫大の金額にして、試に之を計算せんば、古記録に、享和元年春三月、御貸米相場兩に七斗六升とあり、若し三百兩を以て米を買はんか、實に貳百貳拾八石、即ち四斗入五百七拾俵を得べし、之を今日一俵拾五圓として換算すれば、金八千五百五拾圓に當る、僅々二三ヶ月の遊歴中に、此巨額の金を贏ち得たりとせば、其名聲の盛にして、勢力の偉大なりしは、想像に餘りあり。

尙ほ他の方面より見て如何に士朗の名聲の高かりしかを證すべきは、世に士朗の遺墨の最も多きこと是なり、就中多きは富士の畫賛墨竹又は一筆書きの



人物に、句を題したるもの等にして、朱樹又は朱樹山人と落款し、例の楕圓形の朱樹の印を押したるものなり、此地方の舊き家若くは少しにても、書画を藏する方には、士朗の遺墨を藏せざるはなしといふも過言にあらず、時として山水などには氣韻高く、大雅の壘を摩するが如き逸品もあり、隨而其當時より贋作も行はれしは世にもてはやされし一證なり。

余は、上來士朗の名聲の盛なりし事を叙述し盡したりと信すれども、尙ほ次の一條を紹介せん。

文化五年辰春、考者可笑として出版せる、名府玉盡しといふ評判記あり、小寺玉堯の舊藏にして今は東京早稻田大學圖書館の所藏なり、あらゆる名古屋の人物、流行店等、當時有名なる者の評なるが、其卷頭に、

極上上吉 宗匠

士朗

玉句は雲井に光る

親玉

とし其評判に

卷頭

極上上吉

士朗

風雅俳諧の達人と聞へ、陸筑紫のはて迄も其名かんばしく、道にかしこき風人仰ぎ尊ますと云ふことなし、昔のそてつ翁とやらんの名匠にもおとるまじき宗匠にて、諸國行脚の輩、つでをもとめ、宗師の尊顔にまみえんと尋來る人、ちまたに引もきらす、其すさまじき勢、中々言語にのべがたし、此位迄は聞及んで居り増る。**町中**抑々おどろき入りました、左様な尊師さまとは存じませず、御醫者さん井上さまと計り思ひ升たが、是は二ツも三ツも肝がつぶれます。**悪口**濟ぬぞやく、さほどうづ高イ宗匠とやらんならば庵室にも居られそうなものなれども、そうでもなし、やつぱり繁花の土地にいながら、醫者の片見世宗匠といふべし、あまり評判が高過るぞや。さればでござり升、作者生れ付の不風雅でござり升れば、此評判四郎とも九郎ともねからわかりませず、夫故此山越て、あちらの片山蔭におはします、庵主さまに、此評位定めして貰ひました、すさまじい者、すさまじい者、凡天が下にならひなき宗匠さま大達者で御ざりますげな、よつて當春評判記には、惣卷頭第一にすへ升た、當時の達物、親玉親玉。

士朗、晩年中風に罹りし由は從來傳へ聞けるが、梅間が傳中にもしか記せり、



そも晩年とはいつ頃を指せるにか、鈴屋の同門なる植松有信が長閑日記有信の自筆にして

文化四年正月以後四月七日迄の日記なり水谷奥嶺氏の所蔵にして名古屋史談會より發行せる植松有信遺文中に載せたり

文化四年三月十八日の條に、

戌刻過井上專庵を訪ふ、一兩以來、又疾ひ重りがになりたるよしにて、今宵は齒いたく痛むよしにて、不逢歸ル。

とあり、一兩以來、又疾ひ重りがになりたるよし云々とあれば、こはかりそめの病とも覺えず、もし中風初發後のことにはあらざるか、文化七年の玉兔集には、

誰不送春秋、一年三百日、煙霞藥此身、恐治愚癡疾。

月霜を壁に秋ふる影法師。

かゝるしつこへらしきこと書たれば、大に人にとかめられて、いひわけも得せて居たりけるか、又人來りて、今宵月よし、橋までゆかむ、いさや松の下まてなごそゝのかしたれと、起もあからて。

山里の月夜をはこへ庭の松。

とありて、病中らしく推測せらる、而して文化八年には、既に餘程重態にて、言語も六つかしく、正風復古の事蹟を尋ねしに、筆答せられしとは、梅間が力

草に記する所なり、三河刈谷の某氏が所藏に、秋舉自筆の士朗病床日記ある由にて、嘗て其寫しを得たれば、左に之を記さむ。

朱樹老先生、こゝち例ならざる上に、ことに甚しきは、六日の空より物一粒たにすゝみ給はず、覺束なき事明暮にせまりける、とみに來り給へかしと、十日暮つ方、春艸か許より文さし越しぬ、且驚き、且心そらなれば、明易き夏の夜さへ、明るにまたるく、雨いたく降れど、鶏鳴にいたれば、雨の中にも曙の色見え渡るをちからに、立ちいてぬ。

よへの雨に道路あゆみ苦しき、泥濘なり、馬かるも物むつかしければ、かちにて十餘里の道、ひた進みに急ぎければ、黄昏前枇杷園の軒に草鞋をどく。芒の棧を渡りて、綠萼窓の病床に入る、孝子うちこぞり給ひて、いとねもころにいたはり給ひぬ、我も側近く進みよれば、兩眼見開き、じろりと見給ふばかりにて、うなづき給ふ力さへなく、あとの月附添ひ侍りし俤だに聊もなくして、眼落窪み、頬骨高く、腮長く、髭おごろに、容顏の憔悴他の人を見るに等し、只落そふ物は涙のみにして、しばしが程は鼻うちかみ、うづくまる



のみ。

十二日。 過し彌生の空、花もほとよく咲出れば、心慰めんと、病床の窓うち明て、花見給へかしと、吟情催はさせ給へかしなど、勸め参らせければ、面白しと思ひ給ひけむ、自ら起直り給ひて、にこくとゑみふくみ、稍しばしが程沈吟のさまなりしに、かしらをあげ、花に指さして、左手に筆をとり料紙引よせ、さらくと書給ふを見るに、あの花も日あらずして散ッセ、若葉となるに程あらし、我天然を終るも、若葉の露とともに、四月十二日を期とすべしと、心にちかふなど聞えける、花ものいはねど、人の情を動かすものならめど、かゝる哀れなる花の吟席とは思はざりき、一坐うちしめり、吟哦の事は餘所になり行きぬ、其今日は大切の日なり。

十三日。 けさは吃逆出て、病苦いさゝかゆるみ、すやくと眠り給ふ、顔うるはしく見ゆ。

十四日。 日頃不語にわたらせけれど、耳明なり、ほととぎす音信なくを告参らせければ、油断なく聞とゞめ給ひしや、笑み含みうなづき給ひぬ、月の

夜比の空なればとて、やり戸細めに引明れば、月ありながら村雨のむら降る空のけしきなれば、

いかにせんこぬ夜あまたの郭公またしとおもへと村雨のそら。

家隆の和歌、坐右に書つけられ、輿にいり給ひぬ。

十五日。 房といふ婢女、抱養の爲にて、此年頃側はなし給はず使はせ給ふ、この婢女生篤實にして、永き年月看病にうみたる氣色もなく、かく重らせ給ふ程、萬まめやかにまゐらす事、親につかまつるにひとしき、しほらしきものなり。

十六日。 いさゝかよろし。

十七日。 いさゝかわるし。

十八日。 晝過る頃、けふはいかにや、蕎麥てふ物好み給ひぬ、いそぎ調じてすゝめ参らせけるに、一箸だに咽を通さず、あした夕へに氣力衰へ給ふ事ごとにしれりと、涙に閉さぬ者とはなし。

十九日。 粥すゝめ参らせけれど、薬すゝめ参らせけれど、固辞し給ひ、只冷水は、自ら言給ひて、口あかせ給ひぬ、冷水は咽うるほすに快きにや、食



事は断て、はやく正念の命終を急ぎ給ふ心にや知らず。

廿日。ことなう雨ふれど、かはり給ふ事なし。

廿一日。けふは寒熱往來あり。

廿二日。吃逆はなほだし。

廿三日。吃逆朝よりやみぬ。

廿四日。いさゝか薬すゝみて、顔色やはらぎ給ひぬ。

廿五日。雨降、また熱氣出ぬ。

廿六日。朝より三度おも湯すゝませ給ぬ。

廿七日。寒熱往來。

廿八日。けふは終日、たゞおろ／＼と眠り給ぬ。

廿九日。喘強く。

五月朔日。喘やまず、夫につれて寒熱往來。

二日。大便不通により、大黄いかにといふ、きければうなづき給ひぬ、

すゝめ參らすに、快げにすゝみ給ふ。

三日。うつ／＼として静也。

四日。めだちて憔悴。

五日。脈狀か弱くて、力なく、何か嘆息し給ふ。

六日。雨降て窓うす暗く、衰へ給ふみすがた、あはれさそふばかりに  
なん。

以下缺く

かくて日に／＼衰へ行きて、終に十六日に至りて歿したるは想像に難からず。

余は筆を轉じて、井上氏一家の事を叙述して、以て此篇を終らんとす、照運寺  
過去帳に據るに、

心翁安隆信士。 享保十七子四月廿二日。 井上安清父。

月心貞光大姉。 延享四 卯 七月四日。 井上安清母。

是れ士朗の祖父に當る、安隆夫妻なり、之に因れば、安清は廿歳にて父を  
喪ひ、三十五歳にて母を喪へるなり。

露月安清居士。 安永五申九月十八日。 新町 井上安清事。

圓通妙音信女。 明和元申八月廿六日。 井上安清妻。

是れ士朗の養父母なり、碑文に據れば、安清歳六十四にして歿せり、然れ



ば安清は不幸にして、五十二歳にて、其妻を先だてたるなり、而して士朗は、三十五にて父を喪ひ、二十三の時母を喪へるなり。

幻露童女。延享元子五月廿九日。井上安清娘。

童女と法號すれば、幼き者なるべし、安清三十二歳の時なり。

龜翁宗鑑居士。天明三卯四月廿四日。井上專庵父。

孤巖辞峰大姉。寛政七乙卯五月廿八日。井上專庵母事。

是れ士朗の實父母なるべし、安清の碑文に、弟の子を以て子と爲すとあれば、即ち安清の弟にして、天明三年は、安清歿後七年なれば、士朗が引取りて、孝養を盡ししならん。而して士朗は、四十二にて實父を喪ひ、五十四にて實母に別れしなり。

松翁幽操居士。文化九壬申五月十六日。井上專庵父。松翁老。

淨證院桃萼貞源大姉。文化五戊辰三月七日。井上專庵母。

是れ即ち士朗夫妻なり、妻は安清の娘なるか、或は他より娶れる者なるか今知ることを得ず、士朗も亦六十七歳の老齡にて、其妻を先だて、しかも其身は、中風の病に罹れる後と覺しければ、如何に悲嘆に沈みし事ならん、

法名に院號を付するは、重き事なれば、此時井上氏の家格は、先代よりは非常に立ち優り、且士朗在世中なれば、葬儀等も盛大なりし事なるべし、されど祖母も母も、代々院號なき故に、一旦選びし院號を用ひざる事になりしと思はる、又士朗の年七六才の記入あれども、碑文に明に七十一とあり、且文化八年には、七十の賀集として、飲中八歌仙、長壽樂、布袋等の梓行せられたるあれば、誤りなるは言を須たす。

徳山文進童子。明和元申九月十四日。井上安清孫。

是れ士朗の長子なるべし、士朗二十三の時に當る。

杏庵幽林居士。天保四癸巳二月廿三日。井上專庵老。

保安泰壽大姉。弘化四丁未正月十四日。井上千南妻。

是れ士朗の子專庵夫妻なり、專庵の醫歴に、享和三年四月二ノ丸御次療治熨斗目着用相濟申候とあれば、士朗隱居して松翁と改稱し、專庵の稱を其子に譲りしは此時なりと想像せらる、而して此の夫妻の間に、次の二男一女ありしも、何れも早く世を去りて不幸を重ね、家道も衰へて、其妻の如きは、專庵歿後十四年の間、獨の身となり、何方にて養はれしか、井上氏



は其昔の俤もなく、寺にても専庵の名さへ知る者なくて、過去帳に、千南  
などと宛て字にて記入せらるゝに至り、此人歿して井上氏の祀全く絶え  
たりと思はる。

乙應諦幻童子。

享和元辛酉七月四日。

井上専庵孫。

是れ士朗の子なる専庵の長子なるべし、享和元年は、いまだ士朗隠居前な  
れば、こゝに専庵と記せるは、士朗の事なり。

覺了幻夢大姉。

文政七甲申六月廿九日。

井上専庵娘。

泰心立安居士。

文政十丁亥九月八日。

井上立安。

共に士朗の孫なり、何れも十七八歳位にて歿せしとおぼし。

心能了安信士。

寛政六寅九月五日。

井上貞庵事。

寛政六年は、士朗五十三の時なれば、或は弟にあらざるか。

一心元徳居士。

文政七甲申四月六日。

井上元徳事。

文政七年に、若し士朗生存すれば八十三となる、此人は士朗の子にして、  
専庵の兄弟にはあらざるか。

尙ほ士朗には娘ありて、瀬戸地方へ嫁したる由なれども、其家も今は絶え

て知る由なし。

嗚呼人世榮枯盛衰は數の免かれざる所なり、何ぞ唯井上氏一家に止らんや、我  
士朗翁、生きては良醫として、濟生の功を一代に施し、死しては、俳星として、  
風雅の光を後世に輝かす千載不朽の人か、千載不朽の人なり。

名醫にして俳仙たる士朗翁も、其後裔絶えて香華を手向くも者もなく、墓所の何れに在るかを知れる人も少かりしが  
余は大正四年以來遍く名古屋名家の墓所を訪ひ、數回照運寺の墓所に参詣せり、近親なる小坂井有隣氏も平生朱樹翁  
崇拜の一人なれば、祖先の墓参の序姉君と共に、花筒を建て花を手向けて翁を追慕せられたり、然るに大正六年十月  
翁が舊宅の隣家なる鈴木半右氏、俳友加賀波鶴氏と語り、追善會を催さるゝこの事を鈴木信吉氏より傳へ聞き、余  
は長戸流仙氏と共に之に参加し、十月十四日初めて一場の法會を營み遺墨を展覧せり、此第一回には沼波瓊音氏も遙  
々東京より特に参詣せられ一場の講話をもせられたり、翌年よりは朱樹會と稱し、正當なる五月十六日に之を行ひ、  
寺の門前に石標を建て、墓の所在をしるべせり、かくて年々斷えず行ひ來り、十年よりは更に半掃庵也、暮雨巷曉臺  
兩家をも追弔することし、紀念繪葉書を頒ち、年を逐ひて次第に盛になりもて行けり、其間鈴木信吉氏は陰に陽に  
此會の爲に力を盡され、又四日市なる鈴木藤平氏は其數代の先人李東翁が枇杷園門下なるを、氏が俳趣味により特



に賛助を與へられ、又三家を弔ふ事となりし以來、石原金一氏は其祖先文樵翁が也有翁隱宅に仕へられし關係を以て也有翁の爲には一身を捧げて本會に盡され、近く矢田一遺、加藤霞村兩氏も一臂の力を添へられ、渡邊素心氏の如きは初會以來每會勞を執らる、かくて俳人なる否とに限らず、苟も文雅に志ある士は、本會を賛助して年々追善の筈を開き、名古屋に於ける年中行事の一と成れるは、我人共に喜に堪へざる所なり。

又此句集の板木は元永東書店所蔵なりしを、後梶田文光堂譲り受、先年梶田主人物故の後賣却する事となりしを、本會の後援者石田元季氏の厚意に依りて譲り受くることとなり、類題集七部集の版本と共に我々の所有に歸せしかば、今回相謀りて先句集並に同後編を重版することなしぬ、依りて其願末をかくしるすになむ。

佩蘭居士再識

大正十五年六月八日印刷  
大正十五年六月十三日發行

發行兼編輯者

朱 樹 會

代 表 者

名古屋市中區鍋屋町二丁目十一番地  
鈴木 半右工門

印 刷 者

名古屋市中區小林町十二番地  
三 浦 荒 一

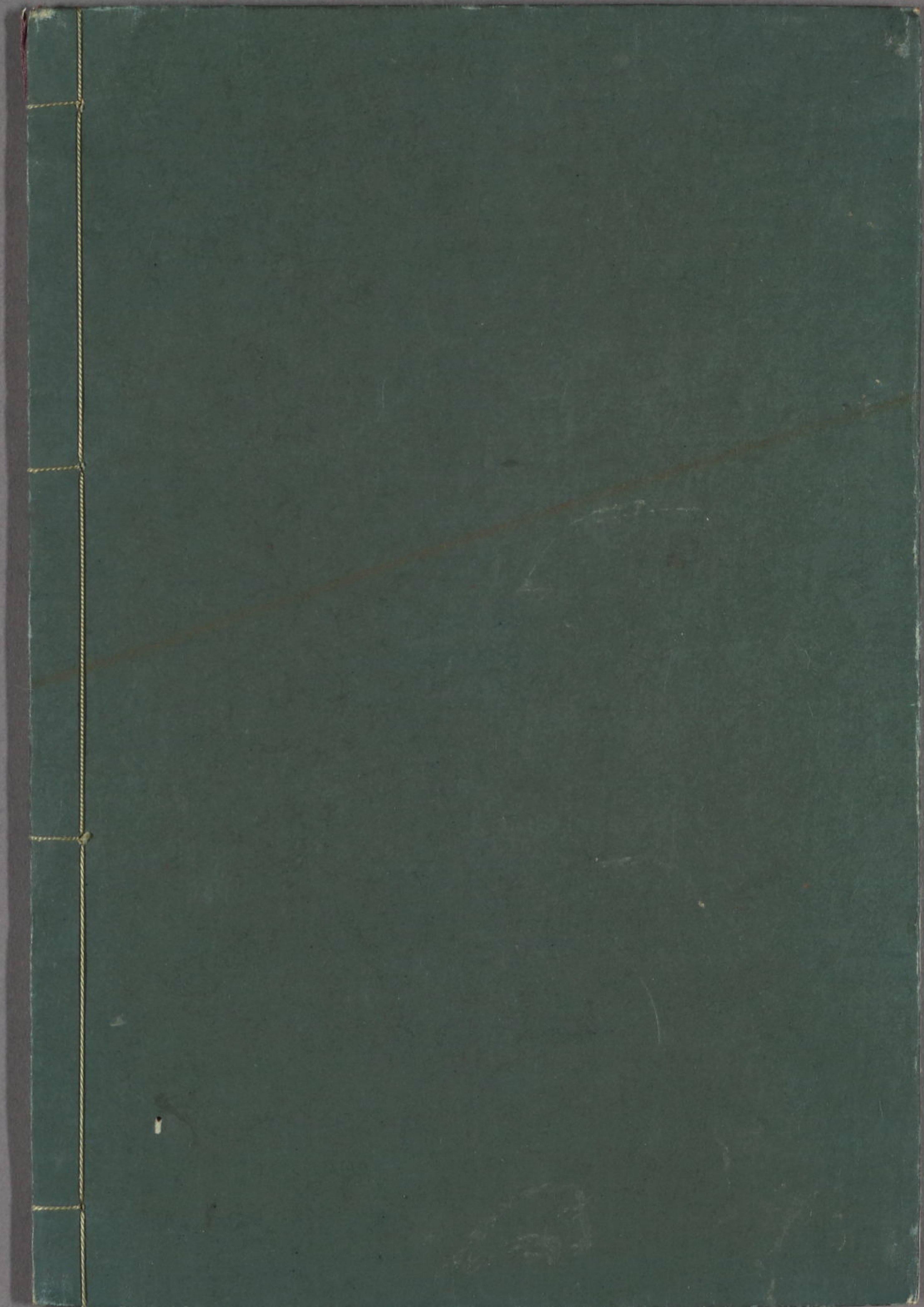
印 刷 所

名古屋市中區小林町十二番地  
三 浦 印 刷 所

發 賣 元

名古屋市中區南園町一丁目  
岩 田 三 友 堂







枇杷園士朗先生

菴旬集

浪越 朱樹會